「レオナルドx ミケランジェロ展」を観る　2017年9月2日　虎長

三菱一号館美術館で9月24日まで開催の展覧会を8月30日に観賞した。

この二人を同時に比較する展覧会は、世界で初めてとのこと。イタリア側後援者も、そう述べているので、日本側主催者の誇張した宣伝文句ではなさそう。展示会名につられて完成品の大作を沢山見られると期待して訪れると、展示会の地味さに落胆するかもしれない。「素描を中心とした比較」という副題を展示会名に付加するのが親切だと思う。素描の他、手稿・手紙の展示も多かった。

しかし、観賞の価値がないわけではない。素描=デッサン、イタリア語ではデゼーニョ(単数)、デゼーニ(複数) が如何に重要であるかが、本展示会でよく分かった。デゼーニョは、イメージ(形)を整えるだけでなく、デッサン(図案)、ドロー(描写)をし、デザイン(考えて設計計画を練ること)を意味するそうだ。本展で数多くの素描を観ると、日本画の下絵に比べ、確かに細かく念入りな描き方だ。

以下に両者の比較を表にしてみる。

	レオナルド・ダ・ヴィンチ	ミケランジェロ・ブオナローディ
年齢差	23歳年上	
活動場所	フィレンツェ・ミラノ	フィレンツェ・ローマ
素描の濃淡	左利きで、左上から右下への斜線(ハッチング)	右利きで、斜線を交差させるクロスハッチング
作品の特徴	静的、分析的	動的、目の中のコンパスによる
絵画と彫刻	3次元を2次元で表す絵画の方が優れているとの考え。粘土や蝋の小さな習作はした	絵画と彫刻の優劣を論じない。多くの彫刻を作った
肖像画	いくつかの傑作あり	殆ど描かなかった
手稿	訓戒を寓意で暗示	自己に哲学的な問いかけをする
競作	フィレンツェ・ヴェッキオ宮殿壁画(未完で残っていない)	
共通点	（1）素描重視 （2）自然の模倣を超えた普遍的な理想像の追及。	

序章：レオナルドとミケランジェローそして素描の力

レオナルド：「少女の頭部/「岩窟の聖母」の天使のための習作」**Fig 1**

ミケランジェロ：「『レダと白鳥』頭部のための習作」　**Fig 2**

上の表の「素描の濃淡」参照。

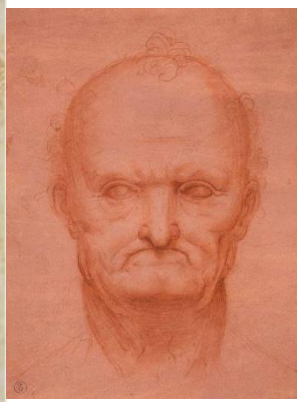


Fig 1 少女と言っても目つきが凄い　**Fig 2** モデルは男性　**Fig 3**

Ⅰ．顔貌表現

レオナルド：「老人の頭部」 **Fig 3**

人相学による典型化が、後の「最後の晩餐」に活きたという。

II. 絵画と彫刻

ミケランジェロ：「河神」**Fig 4**

ミケランジェロ：「背を向けた男性裸体像」 **Fig 5**

解剖学的に正しくなくても、ねじれた筋肉の迫力が凄い。

ミケランジェロ・ブオナローティ
《河神》 1525年頃
カーサ・ブオナローティ
©Associazione Culturale Metamorfosi and Fondazione Casa Buonarroti

ミケランジェロ・ブオナローティ
《背を向けた男性裸体像》
1504-05年 カーサ・ブオナローティ
©Associazione Culturale Metamorfosi and Fondazione Casa Buonarroti

Fig 4　**Fig 5**

III. 人体表現

レオナルド：「ヘラクレスとネメアのライオン」(素描)。ミケランジェロのダヴィデ像に対抗するもの？

ジョルジョ・ギージによる、「ミケランジェロに基づく最後の審判」はシスティーナの壁画の模写だが彩色でなく白黒で個々の絵は小さい。それでも、すべてを網羅したスケールが驚きだ。

IV. 馬と建築

レオナルドの馬の細部描写への熱狂に圧倒される。

V. レダと白鳥

本展では珍しく油彩画が展示されていたが、いずれも本作は失われ、弟子に
による模写。

。

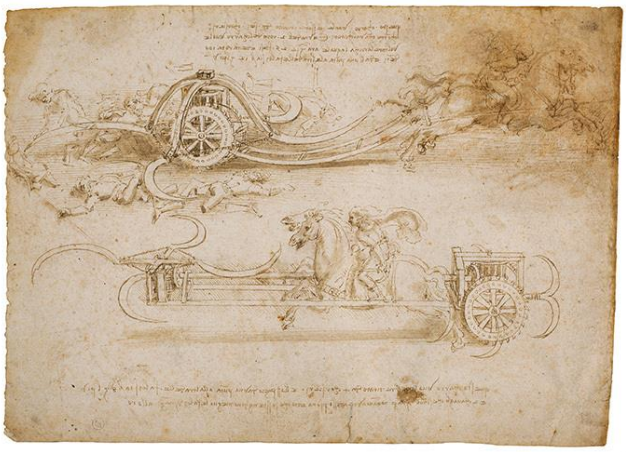
レオナルドのもの Fig 6 は、好色そうな白鳥の顔と卵(父親が白鳥なので)から赤ん坊が生まれるのが滑稽。ミケランジェロのもの **Fig 7** は、「体位」が写実的で、レダの太腿が官能的だが、レダの顔が男性モデルによるためか魅力的でない。

フランチェスコ・ブリーナ（帰属）
《レダと白鳥（失われたミケランジェロ作品に基づく）》 1575年頃
カーサ・ブオナローティ
©Associazione Culturale Metamorfosi and Fondazione Casa Buonarroti

Fig 6

Fig 7

VI.手稿と手紙



ミケランジェロ関連では手紙が多かったが、レオナルド関連では設計図のようなものがかなりあった。**Fig 8** は「大鎌を装備した戦車の二つの案」。実用的でないことは当人も認識。好戦的なミラノ公、ルドヴィーゴ・スフォルツァを喜ばせるために描いたらしい。

Fig 8

終章：肖像画

Fig 9

レオナルド派の画家による「貴婦人の肖像」　**Fig 9**
長い間レオナルドの作と伝えられ、ジョヴァンニ・アンブロージョ・デ・プレディス作ともされたが、現在作者が特定されていない。レオナルドにしては硬直だが、アンブロージョにしては生命観と色彩感覚に優れているとのこと。

Fig 10 は、一塊の大理石から成る高さ 2.5M の「十字架を持つキリスト」。日本の美術展には珍しく、これだけは写真撮り放題。ミケランジェロによる未完の作を 17 世紀に完成させたもの。若い頃のミケランジェロの作品に比べてすっきりしているが、キリストにしてはギリシア・ローマ的な堂々たる体格は、いかにもミケランジェロ的。

Fig 10

以上